

支 部 活 動

九州支部

□第39回

日本肺癌学会九州支部会

平成11年7月29日(木)
30日(金)

長崎ブリックホール
当番幹事 綾部公懿
(長崎大学第1外科)

特別講演 平成11年7月29日(木)

肺癌外科治療の最近の進歩

千葉大学肺癌研究施設外科

藤澤武彦

教育講演 平成11年7月30日(金)

チェルノブイリ原発事故後の
小児甲状腺癌多発について

長崎大学原研細胞 山下俊一

1. 肺腺癌におけるp53蛋白発現
と血管新生

長崎大第1外科 近藤正道
森永真史, 田川 努, 高橋孝郎
赤嶺晋治, 岡 忠之, 綾部公懿
田川 泰

40歳未満, 60歳台, 75歳以上の肺腺癌切除例3群について, p53, VEGF, CD34, PCNAの蛋白発現を免疫組織学的に比較検討した。40歳未満肺腺癌でのみ, p53蛋白発現によるVEGF蛋白発現昂進に対して腫瘍内新生血管の旺盛な反応がみられ, 腫瘍内新生血管とPCNA蛋白発現は著明な正の相関を示した。若年者肺腺癌では, p53蛋白発現に対する旺盛な腫瘍内血管新生が著明な増殖能昂進を引き起こす。

2. FADD遺伝子導入によるp53
耐性肺癌細胞の増殖抑制

九州大学大学院胸部疾患研究施設 高山浩一

中西洋一, 川崎雅之, 尾崎真一
裴 新海, 葉 青, 原 信之
同 循環器内科 上野 光
同 医学部学生 今村公一

野生型p53遺伝子を有する肺癌細胞(A549, H460)に対しては, p53遺伝子導入による殺細胞効果が比較的弱い。これらの細胞ではp53の発現に伴うmdm2の発現誘導が耐性化の一因と考えられた。そこで, アポトーシス誘導におけるもう一つの重要な経路であるFas-FasLシステムの活性化を試みた。Fasシグナルの伝達を仲介するFADD遺伝子をこれらの肺癌細胞に導入すると細胞増殖は著明に抑制された。

3. 線維化肺組織におけるp53,
PCNAの発現についての検討

九州大学大学院附属胸部疾患研究施設 肝付兼仁

中西洋一, 高山浩一, 井上孝治
出水みいる, 綿屋 洋
南 貴博, 原 信之

PCNAやp53発現の頻度が高い組織は, DNA障害やその修復機転が頻繁に生じていることが示唆され, 肺癌の発生素地として肺の線維化病巣は重要な意味を持つ。線維化病巣を有する切除肺を対象としてHE染色を用いて異型上皮を分類し, 免疫染色でp53, PCNAについて検討した。p53, PCNAは種々の異形上皮に過剰発現がみられ, 上皮の重層化と相関がみられた。上皮の重層化は発癌過程において重要な

意味を持つと考えられた。

4. 肺癌組織における細胞表面
分子の発現及び樹状細胞浸
潤に関する免疫学的検討

九州大学大学院胸部疾患研究施設 南 貴博

中西洋一, 高山浩一
出水みいる, 肝付兼仁
原 信之

腫瘍組織内では, 腫瘍細胞による免疫逃避機構のために細胞上のHLA分子, B7分子が減少・消失し, また樹状細胞(DCs)浸潤も減弱している可能性が示唆されている。今回, 肺癌組織89検体を用いてこれらの発現について免疫染色法にて検討した。組織別では発現に有意な差は見られなかったが, 病期とHLA-class II発現, 組織分化度とHLA-class I, II, DCs発現は相関していた。また, HLA-class II, B7-1, DCsが高発現であるほど生存期間の延長が認められた。

5. 肺癌における予後因子およ
びETS-1, MMP-1の発現の
検討

国立嬉野病院外科

久野 博, 木田晴海, 新海清人
柴崎信一, 進藤久和, 中田哲夫
長崎大原研資料室 内藤慎二
径30mm以下の原発性肺癌切除例36例を対象とした。再発例は9例で5年生存率は74.8%であった。予後因子の検討ではリンパ節転移陽性, 中および低分化型, 高度脈管侵襲が予後不良因子であった。血管新生促進因子で誘導される転写因子ETS-1と

九州支部

MMP-1の発現(n=27)は相関することが示されたが、再発との関与は示されず、30mm以下の肺癌の予後因子にはならなかった。

6. 化学放射線療法と放射線肺臓炎

長崎大第2内科

末永光宏, 寺師健二, 福田 実
福田正明, 岡三喜男, 河野 茂
当科にて放射線療法を試行した肺癌患者53例の放射性肺臓炎の出現頻度等につき検討した。放射性肺臓炎を発症した症例は21例で, 200日までに発症が見られた。解析を行った結果では性別のみで有意差が認められ, 放射線照射の総量・一日照射量や化学療法ではCPT-11の有無では有意差はなかった。

7. 当科の肺癌脳転移症例の解析

長崎大第2内科

土井誠志, 寺師健二, 笠井 尚
早田 宏, 岡三喜男, 河野 茂
今回我々は過去3年間に肺癌にて当科入院となった140症例を対象に脳転移の頻度, 予後因子について検討を行った。初診時に脳転移をきたした症例は全体で11%であり, 扁平上皮癌で17%, 小細胞癌で27%, 腺癌で33%と腺癌が多かった。また肺癌脳転移症例の予後の検討については, 非小細胞癌において脳以外の多臓器転移をきたした症例と神経症状を認めた症例において予後悪化の傾向が見られた。

8. 肺癌診断時脳転移症例の検討

大分県立病院胸部外科

山本 聡, 内山貴堯, 山岡憲夫
橋爪 聡, 徳永隆幸
当科における肺癌診断時脳転移症例は44例で, 男性32例, 女性12例。平均年齢は60.9歳。肺切除群(8例)の平均生存日数は

702日で, 最長生存3143日も含まれた。非切除群(36例)に1年以上生存例はみられず, 有意に肺切除群が予後良好であった($p < 0.05$)。転移脳腫瘍に対しても切除群が非切除群に比し予後良好であった(605日 vs 139日)。結論: 脳転移肺癌症例においても, 転移巣のコントロールが可能ならば原発巣の積極的な治療を考慮すべきである。

9. 原発性肺癌に対する胸腔鏡下肺部分切除術の経験

聖フランシスコ病院外科

山住和之, 白藤智之
林田 謙, 大曲武征

過去7年間, 本院において原発性肺癌に対する診断及び治療目的に, 胸腔鏡下肺部分切除術10例を経験した。術前確定診断が出来ていた3例は高齢と肺機能低下を認めたため, 本術式を採用した。他の7例は術前確定診断がつかず, 肺癌疑いで本術式を採用した。1例は同日, 開胸肺葉切除術を施行。2例に術後ポート部再発を認め, 再手術を行った。原発性肺癌に対する本術式の有効性, 及び問題点について報告する。

10. 間質性肺炎を合併した肺癌切除症例の検討

鹿児島大第1外科

松尾洋一郎, 松本英彦
柳 正和, 西島浩雄, 愛甲 孝
特発性間質性肺炎は, 感染・手術などにより急性増悪を来しやすく, 最終的には呼吸不全死となる。我々は間質性肺炎合併肺癌切除例3例を経験した。3例中1例は術後脳転移が認められると同時に間質性肺炎の急性増悪をきたした。間質性肺炎は寛解したものの呼吸機能悪化のため手術不能となり死亡した。また3例中2例は術後良好に経過したが,

1例は縦隔リンパ節再発を認め, 放射線療法を行った。もう1例は現在も生存している。間質性肺炎合併肺癌の予後は急性増悪の危険性があるとはいえ, やはり肺癌で規定されており, 急性増悪の予測およびその病状把握が間質性肺炎合併肺癌の治療法選択には重要と考えられた。

11. 女性肺癌症例の検討

長崎大第1外科

森永真史, 岡 忠之, 赤嶺晋治
高橋孝郎, 田川 泰, 綾部公懿
1993年までに切除した原発性肺癌595例のうち女性肺癌141例(23.7%)を対象にその特性を検討した。女性肺癌の5年生存率は63%と男性の47%に比べ有意に良好であった。組織型については男性と比べ腺癌例が有意に多く, 病理病期ではI期例が86%(61.0%)と多く, これが女性肺癌全体の予後向上に寄与したと考えられた。症例全体, 男性例で予後を規定していた核DNA量は女性肺癌での関連は認めなかった。

12. 若年者肺癌切除例の検討

大分県立病院胸部外科

徳永隆幸, 内山貴堯, 山岡憲夫
山本 聡, 橋爪 聡
40歳未満の肺癌切除例は11例で全体の1.5%を占めていた。年齢16~39歳, 男性7例, 女性4例であった。組織型は, 腺癌, 腺様囊胞癌各3例, 大細胞癌, 腺表皮癌, 粘表皮癌, カルチノイド, リンパ上皮癌各1例でいわゆる低悪性度肺癌は5例45%と多かった。stageはIII期以上7例と進行癌が多かった。肺葉切除9例, 全摘2例を行い, 5例に再発を認めた。5年生存率48%と非若年者と差はみられなかった。